戦後七十年の思い出
軍艦旗を仰いで

OB会員　中島春生

小生は、軍歴僅かに一年程ですが、当時の事を思い出すままに、述べてみたい。

1、海軍に入るまで

日米開戦翌年の春、南満工専に入学した。大連に来てみると、風光明媚、治安も良くて大戦下としては、平和な毎日でした。ハルピンから牡丹江方面まで、官費で見て回る機会があった。

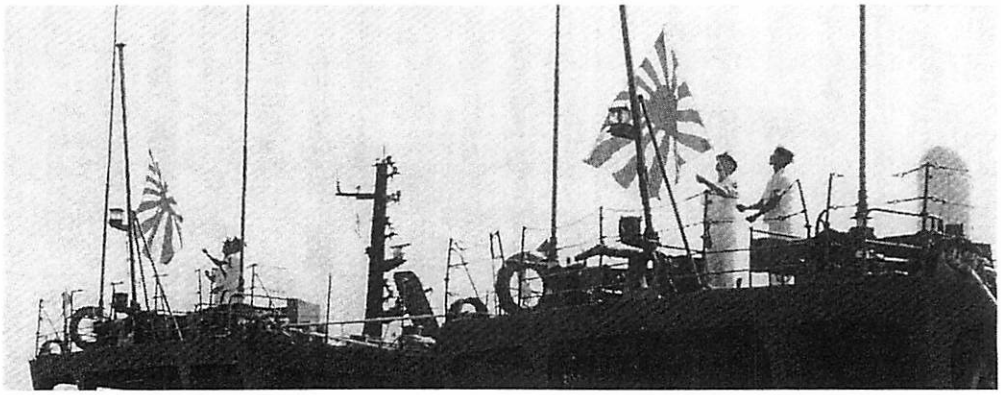
異国の風物も楽しんだが、「校門は営門に通ず」の標語の下、追われるように、海軍に入隊した。当時、我が軍の玉砕の様子を聞き戦局は、すでに破局的段階を迎えていた様ですが、我々若者は皆わが国の勝利を固く信じ一死以って国難に殉ずる覚悟で、入隊した。

2、浜名海兵団で

この海兵団は、静岡県の浜名湖と遠州灘に挟まれた海岸地帯に新設された海岸地帯に新設された。その団歌に「松は緑の浜名湖に映る真白き富士の嶺」とある。この団の中で我々のグループは入団式で「海軍技術見習尉官」に任命された。

全国の工専卒以上の若者二千人の〝短剣集団〟でした、我が所属は一〇四（ヒトマルヨン）分隊で分隊監事は厳かつ慈の木島枝大尉でした。大分県出身者は小生のみで、緊張の毎日でした。

見習尉官と言うのは、少尉の直近下位で、階級



社会の軍隊では下士官や兵から殴られることもなくて、結構な身分でした。反対に、指導してくれた下士官の皆さんは、命令語が使えない等、苦しい立場でした。但し訓練は特訓と言われる程の厳しい内容でした。

あの戦艦大和の有賀艦長の子息、正幸氏も同期の桜で、彼は燃料廠の指揮官になった。技術科士官の専攻は各種に分かれていた。航空関係では、無線・発動機・雷撃……等で他に燃料・造機・造船……等でした。

小生の専攻は航空無線でした。訓練は、午前中は主に座学で、艦船一般・軍制・水雷術……等で毎回試験が行われた。午後は一般訓練で、軍刀術・拳銃射撃・海軍体操……等で短艇(カッター)と駆け足とは徹底して鍛えられた。特にカッターは丸太のような櫂の動きを整え、艇の左右がバランスよく漕ぐのは、体力と漕法が十分になるまでは、うまく行かずに、苦労した。

平素、海兵団内の移動は終日すべて駆け足で、歩いていいと言うのは夕刻入浴後、隊舎に帰るまでの一分間のみでした。

駈足の訓練は、新人を鍛えるには都合のよい種目のようで、隊伍を組んで行われた。途中の落後は許されない。急な坂道を一気に駆け登る時などは「死に方、用意」の号令もあって、へばった者は、引っ張って行った。

きつかった駆け足の訓練も、暫く耐えて頑張っていると次第に心身共に、順応して来て、あまり苦に、ならなくなってきたから不思議である。やがて大半の者が、マラソン大会が何時あっても、OKとなった。

みんな若かった。そして負けられぬという根性があった。このことは後々大きな自信となった。「鉄は熱いうちに打て」と言われるが、みんな打たれ強く、なって来た。

3、海軍工廠で

昭和二十年一月末特訓の浜名海兵団を卒業した。初任地は、神奈川県の藤澤海軍航空隊でした。ここでは、実地訓練に明け暮れた。ケプガンと言う名のリーダーに、各種指導を受けた。ここで海軍工廠の監督官となり千葉県の木更津に着任した。主な仕事は航空無線機器の整備・保全・営繕等で、県下の関係の分廠を回り、廠内の規律維持・機密漏洩防止等の指導・監督にも努めた。従業員の多くは動員学徒と高年者でした。

4、海軍航空隊で

桜の季節が過ぎてから間もなく海軍技術少尉に任官した。同時に転勤命令が下り、第三航空艦隊指令部附きとなった。さあ大変、実戦部隊の中枢で働く事となった。昼夜の区別がないような毎日であった。関東は第三航空艦隊で九州は第五航空艦隊の配備でした。

その内、戦局は益々逼迫し、本土決戦に備えて、指令部は奈良県の天理市の近郊に進出する事となった。

０戦等を間近で見ると、ずらりと並んだ翼の中の機銃弾の行列とか搭乗員席の背後の分厚い防御鉄板等の装備は、いざ戦闘開始の構えでした。無線機には、帰投方位測定器や通信機・送話機等があり各航空隊で、これ等の機器の点検と調整・微調整で明度・感度の向上等を督励した。各部隊で異常なく作動し連絡配備も万全で、何時でも出撃できるように手配・指揮するのが、主な任務でした。研究課題は機器への雑音混入防止策でした。ＦＭ２Ａ０５Ａは、その真空管名でした。

5、敗戦の日

奮戦の甲斐なく原爆炸裂により我が国は、敗戦の日を迎えた。盛夏に正装で一二：〇〇（ヒトフタマルマル）総員整列し、畏まって陛下の「忍ビ難キヲ忍ビ……」の放送を拝聴した。戦は終わった。呆然自失の一日でした。

次の日、そうだ南方に出征した兄との再会の日も遠からず、あるだろうと思いましたがその日は、遂に来ませんでした。兄二人共。

6、敗戦後の再召集

敗戦後九州の五航艦では動揺がややあったようですが、我が三航艦では、比較的順調に敗戦処理が行われた。解員の二、三日前当時のキサマとオレは、近くの法隆寺等を訪れて別れを惜しんだ。「夢殿」など貴重な文化財が無事であったのを喜んだ。別れの記念写真を撮った。当日の弁当は軍の乾パンでした。

帰郷後一週間後「至急出頭サレタイ」旨の電報が届いた。敗戦後、まだ何があるのかと思ったが、発信人が上司のＴ海軍大佐であったので、指定地の広島県呉市広町まで赴いた。

仕事は「兵器処理委員会」の立ち上げでした。廃棄した０戦などを解体の後、溶解してアルミを取り出してインゴットとし、鍋釜の原材料として、市場に送り込む処理でした。毎日、運び込まれる０戦等の残骸に、ああオレは０戦の最後の

見送り人となったのかと涙する思いでした。

敗戦で失業した工廠の工具を集め、燃料は国鉄と交渉して、鉄道の枕木の古材を手に入れた。苦心の末、この仕事を、その年の年末まで続けて、軍関係の仕事は終了した。

でき上がってピラミッド状に積みあげられたインゴットの山は朝日を受けてキラキラと輝き大へん綺麗でした。

ある日豪軍の将兵が、現場を視察にやって来てペラペラと喋り出した。これには困った。が、どうやら「このような作業は、できる丈カバーして（遮蔽して）行うのが望ましい」と言っているようである。それで「オー・カバーOK」と言うと了承したのか、間もなく帰って行った。後刻、T大佐に報告すると「気にしなくてよい」の一言だけでした。それで、この対応策は全くとらずに終わった。彼我双方の温度差は大でした。

現場は海岸で、小生は宿泊兼宿直勤務で大へんな毎日でした。

7、戦の惨害

（隊舎）空襲で隊舎の一部が損じたが、大事に至らず、幸いでした。

（都市）戦争末期、東京や大阪などが一面の焼野原と化したのを見て仰天、息をのんだ。焦土を市内電車が、ヨタヨタと動いていた。

（浜名海兵団）我々が海兵団を卒業後ここは米艦隊の艦砲射撃を受けた。一夜にして若い水兵百余名の戦死者を出した。しばらくしてこの大惨事を聞いて、愕然とした。現在この地は美しい公園と化し昔の面影は全くない。一隅の慰霊碑と共に兵（つわもの）どもが夢の跡である。

（同期の桜）苦労を共にした友のうち何人かの戦死者を出した。敵襲で海軍工廠の砲台長として、連装二五ミリ機銃等の指揮官であった者が多いようである。彼等は即日海軍中尉に昇進したがご両親などの悲嘆の様子を仄聞（そくぶん）するにつけて元気だったらなあ……と胸が悼む。あれからすでに何十年、只、只、ご冥福を祈るのみ。

8、思い出の海軍

●ああ軍艦旗――掲揚されて、はためき昇る軍艦旗を、ラッパの音（ね）と共に挙手の礼で仰ぐとき、何時も、心にも身にも緊張感が走った。

●海軍には「スマートで目先が効いて几帳面負けじ魂、これ

ぞ船乗り」と言うモットーがあった。常にその様にありたいと念じた。

スマートとは単に姿・形のことではない。きびきびした行動と洗練された態度である。毎日の生活は「総員起こし」から始まった。起床ラッパの音と共に全員飛び起きて、寝具を片付け、服装を調え、隊舎前整列、点呼後本部に報告まで三分かからぬ早業でした。几帳面さは起居動作の中で徹底していた。一点一角も疎かにしないのは新前の軍人から見ると、大変な驚きでした。娑婆が「行書」なら海軍は「楷書」でした。「出航用意」を常に心がけた毎日でした。そうでないと戦には勝てぬと言う教えでした。

負けじ魂と言えば、各分隊対抗のカッター競技大会であった。皆懸命に漕いだ。海軍では称えられるべきは、勝者のみである。二位以下は、それが認められない。戦は常に勝つか負けるかだけであると言う。

●「特攻機　桜花」――航空隊で見たそれは機長六mで可愛いとも言いたい姿でした。八〇〇キロの爆装をして、母機〝一式陸攻〟から発進したロケット推進人間爆弾と言う非情な作戦でした。沖縄で敵、駆逐艦を轟沈（米戦死者七〇名）した戦果もあったが、幾多の貴い殉国青年の霊のお陰で我が国の平和な、今がある。

●「海軍」――それは私の人生を支えてくれた、二度とない、貴重な鍛錬の場でした。目に見えぬ〝海軍〟が、時々、私を背後から押してくれた。

9、ただ今

戦後、教職に身を置き勤続四十九年でした。その内、定年後の十二年間はコンピューターの先生でした。軍歴を加えると五十年が勤務の歳月でした。幸、健康に恵まれたのが何よりでした。海軍体操を欠かした日はない。

金婚式の祝いも済んで、現在の年金生活も平穏、もうしばらく無事が続きますように。

※軍隊用語など原文のまま使用しました。

本文は軍隊仲間との交流の場で相互に思い出として交換した文章です。

春来たり傘寿となりし我が身なり
想いは遠し、はまなの日々よ

◇

温習に華、実をまなぶはまなの地
険しき、難き、しのぎて傘寿